

私的言語の可能性と不可能性

The Possibility and Impossibility of Private Language

小森 勇輝

**Abstract**

In this paper, I will focus on Wittgenstein's private language argument, especially on the case of keeping a diary about the recurrence of sensations. Many philosophers have claimed that the sign "E", which refers to speaker's private sensation, couldn't be understood by the others, for it lacks criteria of correctness. To this, I will reply that "E" *can* be understood as a sign of 'sensation', which belongs to our common language. With this, the possibility to use "E" without criteria arises. However, since the identification of 'sensation' doesn't succeed, "E" *cannot* be replaced by common language. I shall argue that this contradiction is essential to private language argument.

**(1) 研究テーマ**

本研究テーマは、後期ウィトゲンシュタイン哲学における「私的言語論」である。とりわけ、「感覚日記」の事例を参照しながら議論を展開していく。

**(2) 研究の背景・先行研究**

A・J・エイヤーと R・リースの論争を皮切りに (cf. Ayer 1954, Rhees 1954)、私的言語 (private Sprache) の可能性と不可能性をめぐる L・ウィトゲンシュタインの議論は、様々な研究者たちの関心を引きつけるようになった。とりわけ S・A・クリプキが、一般に「規則遵守についての考察 (rule following considerations)」と呼ばれている一連の断章から「共同体説」を導き出して以来、『哲学探究』(以下『探究』または PU と略記)における「規則には『私的に』従うことはできない」(PU・202) という所見は、私的言語の不可能性を示すための論拠として注目を集めてきた (cf. Kripke 1982)。いわゆる「私的言語論 (private language argument)」は、第 243 節以降に展開されると言われているが、クリプキの考えでは、「真の『私的言語論』は第 243 節に先立つ諸節において見出されるべきものである。事実、第 202 節において、『私的言語論』の結論はすでに明示的に述べられている」(ibid. p.3 強調原文)。

とはいえ、規則遵守についての一連の考察から「『私的な』規則遵守は不可

能である」という一般的な帰結が導かれるとしても、果たしてそれによって私的言語の不可能性までもが示されることになるのだろうか。実際、「私的言語論」の中心を占めている「私的 (private)」という概念には、「共同体から切り離されて考えられた個人」(ibid. p.110 強調原文) という逸脱的なニュアンスよりも、「それを感じている「私」にとって不可謬であるような感覚の私秘性<sup>i)</sup>」という、一人称権威を象徴する意味合いの方が、一段と強く含まれているように思われる。このような見立てのもと、本稿は私的言語についての一連の議論を、「規則遵守論」の「系」とは看做さずに、あくまでも感覚の言語ゲームにまつわる独立の主題として考察していく。

さて、私的言語とは、その言語の話し手の「直接的で私的な感覚を指示する」(PU-243) ためだけに用いられる言語である。それゆえ、「他人はこの言語を理解することはできない」(ibid.)。本稿は、第 243 節におけるこの「定義」を念頭に置きながら、第 258 節以降に登場する「感覚日記」の事例に焦点を当てていく。これは繰り返し生起する「感覚 (Empfindung)」を「名」に結びつける行為として記号「E」を日記に書き込む、という事例であり、長らく「私的言語論」の中心を占めると言われてきた。この事例の最大の特徴は、日記に書き込まれる「E」の「定義」が述べられない点にある。

次のような場合を想像しよう。私はある感覚が繰り返し起こることについて、日記をつけようと考えた。そこでその感覚を記号「E」に結びつけることにして、その感覚を持った日には必ずカレンダーに記号「E」を書き込む。——私がまず言っておきたいのは、その記号の定義を述べることはできないということだ。——だが、私は自分自身には一種の直示的定義 (hinweisende Definition) を与えることができる！——どうやって？ 私は感覚を指し示すことができるのか？ ——普通の意味ではできない。だがその記号を口にしたり書いたりして、自分の注意をその感覚に向ける——いわば心の中でその感覚を指し示すのだ。——しかし、何のためにそんな儀式 (Zeremonie) を？ というのも、それはそういった儀式にしか見えないからだ！ 定義は、記号の意味を確定するのに役立つ。——ところで、確定することは、まさに注意を集中することによって行われる。それによって、記号と感覚の結びつきを自分に刻みつけるのだから。(PU-258)

記号「E」に結びつけられる感覚とは、自然な表出 (叫び声、顰めっ面、額の脂汗…) からは切り離されて起こる感覚のことである (cf. PU-256, 257)。例えば「痛み」のような通常感覚語であれば、自然な表出は「痛み」の使用の正しさや有意味性を保証する「規準 (Kriterium, criterion) <sup>ii)</sup>」として機能することになる。これに対して「E」が日記に書き込まれる場合には、この

記号の書き込みを正当化する規準は見受けられない（「E」の「定義」を述べるできない所以である）。したがって第 258 節は、公共的に観察可能な規準が存在しない状況で書き込まれる「E」が、そもそも「言語」として成立するのかどうかを問題にしているのである。

これまで多くの論者たちは、私的言語の不可能性を、「E」の適用に規準が伴わない点に見出してきた（cf. Malcolm 1954 p.97, Hacker 1990 pp.118-123, Bertolet 1995 p.647, Glock 1996 p.311）。この手の批判は次のように要約される——「痛み」のような通常的感覺語は、自然な表出を介して感覺と結びついたときに、初めて意味を獲得する。そして、このような規準の設定によって、その後の感覺語の使用の正・誤が判定される。すなわち最初に「痛み」の定義が設けられ、その定義に照らしてその都度の「痛み」の使用に「正しい（richtig）」とか「正しくない（unrichtig）」といった評価が下されるのである。ところが、「感覺日記」の事例においては、このような手続きは踏まれない。「E」の適用を正当化するには、「この感覺を「E」に結びつけたはずである」というかつての記憶や、自分の心の中で繰り広げられる想像に頼るしか方法がないため、「E」の適用が本人にとって正しいと思われるだけで、その適用は自動的に正しいことになってしまう。かくして、「感覺日記」の事例においては、公共的な規準が欠けているために、「正しい（richtig）」と「正しく思われる（richtig erscheinen）」との区別が設けられなくなる。

——「私はそれを自分に刻みつける」とは、その過程を経ることによって将来その結びつきを正しく思い出すことができる、ということに過ぎない。しかしこの場合、私は正しさの規準を持っていない。ここで私にとっていつも正しく思われるものが正しい、と言いたくなるかもしれない。そしてそれは、ここでは「正しい」ということについては語りえないということではない。（PU-258）

記号「E」の適用を、記憶や想像に基づいて正当化するならば、記号の使用者は「正しさ」について語るができなくなる。ウィトゲンシュタインはそのような「主観的な正当化」（PU-265）に対して、「朝刊に書かれていることが本当であることを確かめるために同じ朝刊を何部も買う」（ibid.）、「想像の中で時計を眺める」（PU-266）、「橋の構造設計を正当化するために橋の材料の強度実験を想像する」（PU-267）、「『自分の身長くらい知っている』と言いながらその印として頭のとっぺんに手を置く」（PU-279）といった比喩表現を与えながら、それが正当化として「無意味」であることを示しているように見える。したがって、「正しさ」の規準が伴わないまま適用される記号は本当の意味での「言語」たりえない——多くの解釈者たちは、以上のような

考え方に基づいて、私的言語「E」の不可能性を主張するのである。

### (3) 筆者の主張

第 258 節では、「E」が「感覚の記号」として導入される。この点に注意を払おう。① そもそも私的言語とは「他人には理解できない言語」であった。さて、「E」が私的言語であるならば、他人はこの記号の意味を理解できないはずである。だが、実際には、「E」は「感覚」という公共言語を伴いながら導入されるため、その意味は、他人にとって理解可能なものに成り下がっている。その限りで「E」は公共言語の圏域に属している (cf. 丸田 1998 p.80, 入不二 2006 p.110, 尾形 2010 p.192)。換言すれば「E」は感覚の文法に従うのである。そして次の命題からも伺えるように、感覚が私的であることも文法的に規定される事柄である。「『感覚は私的である』という文は『ひとはペイシェンスを一人でやる』という文に匹敵する」(PU-248)。以上を踏まえると、「E」という感覚の記号は、私的なあり方を文法的に保持したまま公共言語の中に位置付けられることになる。この記号は、私的な感覚を文法的に温存するからこそ、私的言語という当初の想定には到達できなくなる。② 次に規準の不在について。第 243 節が想定する意味での私的言語には、公共的に観察可能な規準が定義上存在しない。そうすると、規準の不在を根拠とする私的言語批判は、「私的言語には規準が存在しない」という、私的言語の「定義」から導かれる内容を単に繰り返し主張することによって、私的言語の不可能性を示そうとしているということになる。しかしながらそのような私的言語批判は、初めから「循環」している(「論点先取」を犯している)ように思われる (cf. 鬼界 2003 pp.316-317)。

①と②を踏まえると、「E」の適用に規準が伴わないからといって私的言語の不可能性が示されるわけではない、ということが分かる。そこで本稿は次のような可能性に着目したい。それは、「E」を規準なしに適用することが言語ゲームにおける新たな「原事実 (Urtatsache)」を成立させるような可能性である。そのような可能性は『探究』第 270 節において提示されている。

記号「E」を私の日記に書き込むことの一つの適用を考えよう。私は次のような経験をする。ある感覚があるときはいつでも、血圧計が私の血圧の上昇を示す。そこで私は、自分の血圧の上昇を計器の助けを借りずに言えるようになる。これは役立つ成果だ。私はその感覚を正しくそれと認めたかどうかは、この場合まったくどうでもいい。(中略)

どんな根拠があって、私たちは「E」をある感覚の名前と看做すのか? もしかするとこの記号がこの言語ゲームで使われている仕方が、その根拠な

のかもしれない。――では何故、「ある感覚」なのか。つまり何故、毎回同じ感覚なのか。それは毎回「E」と書くと仮定しているからだ。(PU-270) この箇所では、「E」を感覚の名前と看做して良いことになっている。だがその根拠は何か。一見すると、血圧の上昇は、「E」の適用の規準になっているように見える。とはいえ、「E」が感覚の名前であることが血圧の上昇という規準によって保証されるとすれば、血圧の上昇が発見される前には、この記号は無意味であったことになる。しかしながら、血圧の上昇の発見によって言えるようになるのは、あくまでも「E」の記入と血圧の上昇との相関関係に過ぎないのだから、この記号は、血圧の上昇によって有意義になるわけではない(相関関係は因果関係を含意しない)。この記号は、規準とは無関係に感覚の名前と看做されるべきである<sup>iii</sup>。実際ウィトゲンシュタインは、血圧の上昇を、「E」が感覚の名前であることの根拠とは看做していない。むしろ彼が着目する根拠は、「E」が言語ゲームの中で恒常的に使用される仕方である。それゆえ、第 270 節で示唆されているのは、「正しさ」の規準なしに「E」を日記に書き込むことは批判されるべき難点ではない、ということである。語の無根拠な使用について、ウィトゲンシュタインは別の箇所でこう書いている。「ある語を正当化せずに (ohne Rechtfertigung) 使うということは、その語を不当に用いるということではない」(PU-289)。

「感覚日記」の事例では、記号「E」が私的言語の候補として導入された。にもかかわらず、(1) 「E」は、「感覚」という公共言語へと読み換えられる。それどころか、(2) この記号を「正しさ」の規準なしに使用することは、感覚の言語ゲームにおける「原事実」へと繋がっている。従来の解釈は、以上の可能性を十分に捉えていないように思われる。他方、ウィトゲンシュタイン自身は、「感覚日記」の事例を通じて「対象と表記」(cf. PU-293) の関係を断ち切ろうとしているように見える。そこで本稿が取り上げたいのは、両者を結び合わせている「指示」という言語モデルである。

通常、「指示」や「命名」は、言語を構成する「制度 (Institution)」、「慣習 (Gepflogenheit)」に属している。したがって制度・慣習から逸脱して対象(例えば「感覚」)を指示しようと注意を集中したり、名(例えば「E」)を繰り返し唱えても、そのような行為は無意味なパロディーと看做されてしまう(cf. 鬼界 2003 p.318)。実際ウィトゲンシュタインは、指示の空転を示すために、多様な比喻を案出している。感覚に対する名の指示は、「右手から左手への現金贈与」(PU-268に喩えられており、そうした行為は謂わば「針に文字盤を固定して一緒に回るようにする」(BB p.71こと、「車での急ぎの旅のときに、あたかも車を内側から押せるかのように、本能的に自分の前に

あるものを押す」(BB p.71)ようなこととして特徴付けられている。確かに第 258 節でも示唆されているように、「E」の指示は、結果的に無意味な「儀式 (Zeremonie)」と看做される。だが、本稿の考えでは、それが無意味な儀式と看做されるのは、「E」の指示が制度・慣習から逸脱しているからではない(第 243 節と第 258 節を注視すれば分かるように、私的な直示的定義はその定義からして制度・慣習の外部にあらざるをえない)。むしろ、記号の使用者自身でさえも記号が指示しようとしている対象(「感覚」)を同定しえないからである。以下では、「指示」や「同定」の内実を明らかにするために、『探究』への先行研究」と銘打たれている『青色本』の議論を援用する。

『青色本』では二つの異なる「私」の用法が設けられている。「客体としての用法 (the use as object)」と「主体としての用法 (the use as subject)」である(以下「客体用法」「主体用法」と略記)。この区別は内観の対象知覚的解釈に対する批判に基づいている。内観の対象知覚的解釈とは、自分の身体感覚を、外界の対象の知覚に見立てるような考えである。ウィトゲンシュタインによると、この解釈が否定される文脈において、上記の文法的な区別が設けられる。客体用法の場合、外界は必ずしも現れる通りには知覚されないため、誤認・誤同定の可能性が残される。ウィトゲンシュタインは「私の額にこぶがある (I have a bump on my forehead)」を例に挙げて次のように論じる。「(中略) 私は鏡を見て、隣人の額のこぶを私の額のこぶだと間違えることもありうる」(BB p.67)。「私の額にこぶがある」の「私」は特定の人物を指示するため固有名による置き換えが可能である。これに対して、主体用法の場合には、身体感覚は主体に現れる通りに知覚されるため、誤認・誤同定の可能性も生じない。例えば、「私は歯が痛い (I have toothache)」と発言する場合には、ある特定の人物を識別するという問題は生じない。『痛みを感じているのがあなただということは確かなのか』と聞くとすれば、それは無意味であろう」(BB p.67)。主体用法の「私」を固有名に置き換えることはできない。にもかかわらずウィトゲンシュタインは、他人がその「私」を特定の人物として理解しても良いことを自身の視点を交えながら論じている。

私は「私」という語によって L.W.を意味していない。しかし私はいま事実として L.W.である以上、他人が、「私」とは L.W.を意味するのだと理解しても、それで用は足りる (will do)。(中略) 私が望むのは、他人が私の言うことを理解するのは論理的に不可能であるということである。私の言うことを他人が理解すると語ることは、偽ではなく、無意味であるべきなのだ。(BB p.64 強調引用者)

本稿の見立てでは、『探究』の「私的言語論」の原型はこの箇所にある。そも

そも私的言語とは、「他人には論理的に理解できない言語」であった。そしてこれは、語の指示対象が同定されないことに起因している。つまり主体用法の「私」は、「E」と同様、私的言語の候補として導入されている。だからこそ、私的言語の候補（「E」や「私」）が挙げられた瞬間、それらの語は公共言語（「感覚」や「L.W.」）へと不可避的に読み換えられるのである。「私的言語論」の眼目はこの矛盾した状況の提示にこそある。それゆえ、「感覚日記」の事例が私的言語をなおも想定しようとする、「E」から「感覚」という規定をも取り除かなければならない。とはいえ、「感覚」を別の語に置き換えたとしても、それもまた公共言語に属するのだから、実のところ、私的言語という想定には、いつまで経っても到達できないのである。ウィトゲンシュタインは、『探究』第 261 節において、そのことを示唆している。

「E」を感覚の記号と呼ぶことに、われわれはどんな根拠を持っているのだろうか。何しろ「感覚」はわれわれに共通の言語の語であって、私だけに理解できる言語の語ではないのだから。したがって、この語を使うには誰もが理解するような正当化が必要である。——それが感覚である必要はない、彼が「E」と記すときには何かを持っている、という言い方をしてもまったく役に立たない。——しかも、それ以上のことは何も言えないだろう。けれども、持っている (haben) や何か (etwas) もまた、共通の言語に属している。——そういうわけで、哲学をしていると結局は、分節化されていない音声しか発したくないような地点に到達してしまうのだ。——だが、そういう音声が表現であるのは、何らかの言語ゲームにおいてだけである。いまや、そうした言語ゲームが記述されるべきである。(PU-261)

#### (4) 今後の展望

これまでの内容を総括すると次のようになる。「E」と主体用法の「私」は私的言語の候補に挙がっていた。にもかかわらず、(1) それらは公共言語へと不可避的に読み換えられてしまう。つまり、「E」が「感覚」の名前として公共言語の中に位置付けられるのと同様に、「私」という語は、「L.W.」のような固有名として理解されてしまう。だが他方では、(2) 「E」や「私」の指示対象が同定されないため、「E」や「私」を、「感覚」や「L.W.」に置き換えることはできなくなる。(1)と(2)は矛盾している。この矛盾をどう理解すればよいのか。この矛盾から「語りえず示される独我論」を擁護する方法は導かれるのだろうか。それとも、語ることには失敗しても、まさにその失敗によって示されるものがある、という見解を否定する「決然たる読み手たち (resolute readers)」の考えにならって、上記の矛盾を「明白なるナンセンス」(cf. PU-

464)と看做すべきだろうか。筆者の「仮説」は次の通りである。『青色本』における「私」の矛盾と『探究』における「E」の矛盾とは、その形式や構造においては一致しているものの、中身や背景を異にしている。「私」の矛盾は独我論を語りえないものとして示しはするが、「E」の矛盾はそうではない。後者の矛盾は、あくまでも純然たる「ナンセンス (Unsinn)」という観点のもとで理解されるべきである。今後の研究課題は、そのことを『探究』の「治療哲学観」に照らして論証することにある。その際に手引きとするのは、S・カヴェルとS・マルホールの解釈 (Cavell 1979, Mulhall 2007) である<sup>iv</sup>。

---

<sup>i</sup> 例えば、平田 2013 は、感覚表現の「一人称権威」を裏書きするものとして「不可謬性」と「私秘性」を挙げている (ibid. p.88)。

<sup>ii</sup> この概念は「徴候 (Symptom, symptom)」と対置される。例えば、私の喉が炎症を起こしていることは、私が嘔喉炎に罹っていることの「徴候」であるのに対して、私の血液中にしかじかの細菌が存在することは、私が嘔喉炎に罹っていることの「規準」である。前者は経験的なもの、後者は定義的なものである (cf. BB pp.24-25)。

<sup>iii</sup> 血圧の上昇を規準ではなく徴候と看做す余地はある (cf. 丸田 1998 p.80)。

<sup>iv</sup> *The Claim of Reason*, “Wittgenstein’s Private Language”を参照する。

(慶應義塾大学)

## (5) 参考文献

- Bertolet, R, 1995, “Private Language Argument”, *The Cambridge Dictionary of Philosophy*, Robert Audi ed., Cambridge University Press.
- Glock, H, 1996, “Private Language Argument”, *Wittgenstein Dictionary*, Blackwell.
- Hacker, P.M.S., 1990, *Wittgenstein Meaning and Mind*, Basil Blackwell.
- Kripke, S.A., 1982, *Wittgenstein on Rules and Private Language*, Harvard University Press.
- Malcolm, N, 1954, “Wittgenstein’s Philosophical Investigations”, *Wittgenstein The Philosophical Investigations*, George Pitcher ed., Palgrave Macmillan, 1966.
- Wittgenstein, L, 1958, *The Blue and Brown Books*, Basil Blackwell.
- Wittgenstein, L, 2009, *Philosophische Untersuchungen*, Wiley-Blackwell.
- 入不二基義, 2006, 『ウィトゲンシュタイン「私」は消去できるか』, NHK 出版
- 尾形まり花, 2010, 「基準論は私的言語の不可能性を主張できるか」 『哲学』 No. 61



鬼界彰夫, 2003, 『ウィトゲンシュタインはこう考えた 哲学的思考の全軌跡 1912-1951』 講談社現代新書

平田仁胤, 2013, 『ウィトゲンシュタインと教育——言語ゲームにおける生成と変容のダイナミズム——』 大学教育出版

丸田健, 1998, 「『哲学探究』, 感覚日記の議論について」 科学基礎論研究, Vol.25 No.2